

【小説】もち
【イラスト】218

異世界魔術師は 魔法を唱えない

The another world's wizard doesn't chant.

volume.

I

試し読み版



BEGINNING NOVELS

C ⊕ N T E N T S

THE ANOTHER WORLD'S WIZARD DONE NOT CHANT

created by mochi and 218 - presented by kill time communication
beginning novels series



【第一章】異世界への期待、失望の勇者召喚

6

【第二章】偽りの感情、作られた愛

16

【第三章】東の間の出会い、弟子との出会い

50

【第四章】迫りくる絶望、勇者という希望

76

【第五章】公爵の策謀、裏切り者の罠

104

【第六章】戦いは終わり、平穩は遠く

144

【第七章】騎士との決闘、姫との誓い

178

【第八章】旅路は急ぎ、問題は突然に

215

【第九章】迷いの森、招かれざる客

244

【第十章】一夜の過ち、気の迷い

273

【第十一章】憂さ晴らしの餌食、真夜中の蹂躞劇

301

【第十二章】使命は果たし、悩みは増え

328

【幕間】フェアリス	～ヤード様とエルマイアさんについて～	74
【幕間】サガミ	～ヤード・ウェルナーの人物評～	242
【幕間】アレク	～ヤードという男～	326
ジーン超魔導帝国	魔術一覧	343

第一章 異世界への期待、失望の勇者召喚

「ああつ、四人目の勇者様の召喚も成功しました！」

俺の目の前でそう叫んだのは、金色の髪を腰の辺りまで伸ばし、透き通るような蒼い目が特徴的で、美しい刺繍の施されたドレスを着ているという、まるで中世のお姫様のような姿の美人だ。

俺は現在、どこか別の世界へと来ている。突拍子もない話だが、俺をここへ飛ばした術式のことを考えるとそれしかありえない。

研究室で新しい戦略級術式の開発に没頭していたところに強制召喚型の魔法陣が突然展開され、気付いたときには四方を鎧姿の奴らに取り囲まれていた。そして俺が状況を把握しようとしていた矢先に、ただ一人場違いなドレス姿をしていた正面の女が言ったのが先ほどの台詞だ。

元の世界でも何回かあった報告例から考えるに、おそらくここは魔術依存の文明を築いている中世から近世レベルの世界で、俺は一般的に勇者召喚と呼ばれているらしい、他の世界から設定したスペック以上の能力を持つ人物を呼び出せる強制召喚術式により呼び出されたということなのだろう。

兵士らしき奴らが着ている装飾が派手すぎる時代遅れの鎧を見る限り、俺の推測も間違っていないはずだ。

「勇者様、どうかしましたか？」

「一通り状況を把握するまでは黙っていようと思っただが、何も話さない俺を不思議に思っただか、ドレスの女が話しかけてきた。華美な刺繍の施された服装は、どう考えても下働きの人間ではない。王女か貴族令嬢というところだろう。」

「ああ、済まない。私が召喚されたのは分かるのだが、ここは一体どこなのだろうか？」

「あら、召喚についてはご存知なのです。それならば話が早いです。ここはアンリエント王国の王宮内で、私はアンリエント王国第一王女ソフィア・ル・アンリエントと申します。勇者様にとある協力をお願いしたく、こうして呼ばさせていただきました。ええと、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「これはご丁寧に。私はヤード・ウエルナーという者だ。私が呼ばれた理由についても少し詳しく聞かせてもらってもいいだろうか？」

「ヤード様の他にも勇者様がいらつしやいますので、その話に关しましては国王から皆様にお話をさせていただきたいと思っております。どうぞこちらへ」

俺の他にも呼ばれているのか。俺と同じ世界の人間か、それ以上の魔導技術を有している世界の人間がいるといいんだが。

まずは王との謁見があるらしく、彼女は案内役として俺の先を歩いていった。廊下には高価な調度品が置いてあり華やかに見えるが、あまり実用的な構造はしていないようだ。

※

長い廊下や階段を延々と歩き、やっと目的の部屋へ到着した。

おそらく警備役だろう兵士達が扉を開けると、既に部屋の中には大勢の人がいた。部屋の奥に男女が座っているが、おそらくあの二人がこの国の国王と王妃だろう。

その脇には若い男達が立っており、周りにはやたら金が掛かっているような服を着た者達と警備役の兵士が立っている。

入り口のすぐ近くには二十代後半ぐらいの男が二人と十代後半ぐらいの女が一人、こいつらが召喚された勇者達だろう。

前に進み三人の隣に立って横目で窺うと、男の片方は明らかにこの国では作れないような、化学繊維でできた迷彩色の服を着ている。もう片方の男は一目見て騎士か何かだと分かる鎧姿だ。女はシンブルな聖職者風の服を着ている。

俺が並んだのを確認して、姫は国王の近くへと行ってしまった。これといった説明もなしにいきなり国王との謁見をするようだが、礼儀作法などは大丈夫なのだろうか。

「勇者達よ、よくぞこのアンリエント王国に参られた。私はアンリエント国王ヴェルギリウス・ル・アンリエントである。突然のことに戸惑っているとは思いますが、そなた達に十分に理解してもらえるまで何度でも説明しよう。しかしその前にまず、そなた達の名を教えてはもらえんか？」

流石は国王、普通に話しているだけでも声に威厳みたいなものを感じられる。俺達は顔を見合わせる、反対側の端にいた騎士風の男が自分を指差した。向かい合って分かったが、赤髪のイケメンだった。ついでに俺より身長が高い。どうやら先に発言してくれるらしい。

「私はナギア帝国蒼天騎士団所属のアレク・ギルフレイアと申します。大精霊より魔王を打ち倒し

人々を救えとお告げを受け、ここへと参上しました」

イケメン改めアレクは、どうやら神や精霊といった存在がまだ実在する世界から来たようだ。勇者召喚と呼ばれる強制召喚型の魔法は、概ねその世界の文化や形式にあった形で展開する。

神が実在するような世界では神からの託宣のような形が取られることが多い。奴の世界では大精霊とやらが神の代わりなのだろう。精霊と神の間に大きな違いがあるわけではない。

精霊信仰が文化として存在している上に、託宣を受けるほどにその精霊を信仰しているということは、奴のいた世界はこの世界とあまり文明レベルでは変わらないはずだ。細かいところは違うかもしれないが、大体同じ程度の文明レベルになるはずだ。魔導技術と生活レベルの水準はおよそ比例関係にあるため、おそらく奴の世界では魔術もあまり発達していないに違いない。

アレクが名乗り終わると、次は奴の隣にいた聖職者風の女が前に出た。俺達と並んでもそこまで違和感がないほどに身長が高い。顔は少々幼い感じで、美人というよりも美少女といったほうが合っているような雰囲気だ。召喚された人間の中では一番若いだろう。

「初めまして。聖光教会で司祭位を頂いております、フェアリスと申します。託宣を受けまして、微力ながらもこの世界の人々を助けるべく、召喚陣なるものに導かれて参りました」

綺麗なお辞儀をしながら話すフェアリス。どうやらこいつの世界にも神が存在するらしいが、つまりこいつのいた世界もこの世界と変わらないレベルだということだ。

普通は科学技術や魔導技術のレベルが一定の水準以上になれば神や精霊といった存在は信仰力を失い消滅するはずなので、自分の世界は神から託宣を受けられるような低レベルの世界ですと叫ん



でいるようなものだ。俺なら間違いなく羞恥心で死んでしまう。無知とは偉大だな。

フェアリスが話し終わると、次はもう一人の男が前に出た。黒の短髪、身長は俺と同じ程度だが、よく鍛えられた身体をしている。元の世界でも戦闘訓練を受けていたのだろう。それに明らかに化学繊維でできた服装からして、この中で俺を除いて唯一近代文明から来ていることが分かる人間だ。「自分は共和国軍第五特殊工作部所属のサガミ・リョウヘイです。私が飛ばされる際にはお告げのようなものはありませんでしたが、作戦行動中に突然魔法陣が現れ、気がついたときにはこちらの世界に来ていました」

やはりサガミは軍隊所属か。召喚陣のみで飛ばされてきたということは、概念上の存在を信仰していない上に魔術が普遍的に知られている世界から来たということだ。つまり俺の世界でいえば近代かそれ以降の文明がある世界である。こいつとは話が合うかもしれない。

それにしても作戦行動中に飛ばされるとは不運な奴だ。さぞかし自分の部隊がどうなっているか気になっていることだろうが、奴の態度からは不安の色は一切見えない。ポーカーフェイスを貫いているのを見ると、流石は軍人だと思わず感心してしまう。

さて、次は俺の番だ。正直に言えばこういう大勢の前で話すのはあまり得意ではない。他の奴らはこういう情況も慣れているのかもしれないが、研究室で同僚ぐらいつしか会わない俺は、こういう大勢に注目される経験があまりない。内心ドキドキしながら、何とか普通に見えるよう背を伸ばして一歩前に出た。

「私はジーノ超魔導帝国魔導研究室、戦略級術式開発班所属のヤード・ウェルナーだ。研究室にい

るところを召喚陣に引っかかり、ここに飛ばされてきた」

周囲の視線が集まっているのが分かる。勇者という存在に期待の眼差しを送っている者や明らかに珍しいものを見る目つきの人など様々である。サガミのときもそうだったが、特に俺の格好に注目している奴が多い。確かに勇者を呼んで魔術師が来るのは想定外だと思いが、いちいち疑うような視線を向けるのは止めて欲しい。人々の視線を気にしないようにしながら後ろへと戻る。

「うむ、そなた達がこちらにやってきた経緯は分かった。では次はこちらから、そなた達をこの国へと呼んだ理由について話そう」

勇者達の自己紹介が終わると、一拍おいて国王が再び話し始めた。

「我が国は現在ダーク魔帝国と戦争状態であり、国境地帯では何度も激しい戦闘が繰り返されている。我が国は少数ながらに精銳が揃っており、今まで魔帝国との間にそこまでの戦力差はなかったのだ。しかし魔帝国は長きに渡る均衡状態に焦れたのか、戦場に強大な魔物を解き放つという掟破りをしおった。我が国の精銳達が次々と倒されていき、ようやく魔物を退けたときには多くの兵の命が失われていた。このままでは前線の崩壊は必至である。そこで苦肉の策として、そなた達勇者を呼び出さざるを得なかったのだ。そなた達には是非、魔帝国の軍勢を倒して欲しい」

なるほど、前線を維持できるだけの戦力が足りなくなつたから俺達を呼び寄せたということか。つまりは都合のいい肉壁役だ。冗談ではない。しかしここでいきなり反抗的な態度を取るのも得策ではない。この世界に俺の味方はまだいないからな。

「一つ質問をしたい」

「よからう、言ってみよ」

「仮にその魔帝国とやらを撃退した後、元の世界に帰れるのだろうか？」

これは割と重要な問題だ。自分で送還陣を描くことはできるが、その場合色々手間が掛かるし、数年掛かりの作業となる。そしてそんなに仕事を空けたらまず間違いなく研究所をクビになってしまう。

「それは……残念だができぬ。勇者召喚は呼ぶことしかできんだ」

国王の言葉を聞いて他の勇者達に動揺が走った。

まあ元の世界でも勇者召喚が行われた世界での送還魔法の存在率は約四割と報告があったので、帰れない可能性も少なからずあるだろうと考えていた俺は動じなかった。突然の出来事で無職になった俺の心の中は、もはや悟りの境地に達していた。グッバイ、俺の仕事。

そんなわけで質問をした俺は平然としていたが、他の勇者達は予想外だったのだろう。勇者達の中でもサガミの動揺が酷い。先ほどまでの冷静な態度が崩れ、表情を険しくしている。よく見れば視線も定まっていない。態度には出していなかったが、それほどまでに元の世界に残してきた何か心配だったのだろうか。

勇者達の動揺を見て周りの奴らは何やらひそひそと話している。ソフィアは何故か不安そうに俺を見つめている。多分俺が一番平然としていたから、この場の收拾をつけて欲しいのだろう。

彼女の期待に応えようか迷っていると、俺が口を開く前に国王が先に動きを見せた。

「そなた達には申し訳なく思う。こちらでの待遇はできる限り便宜を図るので、どうか許して欲し

い。情けない話だが、もはやこの国はそなた達だけが頼りなのだ」

「私からも願います、勇者様方はこの国の希望なのです。どうかこの国を救って下さい」

率先して引き受けようとは思っていなかったで、国王から話し出してくれてよかったと思つて
いると、国王達の言葉を聞いたアレクとフェアリスが何かを決意した表情で前に出た。

「お任せ下さい、国王陛下。大精霊と我が剣に誓つて、この国の危機を必ずや救つてみせましょう」
「ええ、助けを求める者に手を差し伸べるのは当然の行いです。私自身は非力ゆえ戦うことはできませんが、傷ついた人々を癒すことならできます。私達の力、どうかお使い下さい」

二人の発言に周りの奴らからおおっ、という歓声上がる。二人に先走られたせいで断りにくくなつてしまつたではないか。人助けは結構だが、俺まで入れているような発言は止めて欲しい。

隣を窺うとサガミも微妙そうな顔をしているので、どうやら俺だけが否定的な考えをしているわけではなさそうだ。

この国の人間でも何でもないので、好き好んで戦いたくはないと考えるのは当然のことだ。サガミの場合は、単に帰れないショックからまだ立ち直っていないだけかもしれないが。

「そうか！ そなた達の志、嬉しく思うぞ。我が国を救うべく駆けつけた勇者達に栄光あれ！」
国王の声に合わせ、周りの人間達も栄光あれ、などと叫んでいる。

この流れになるのは半ば決まり事のようなものだが、何とも余計なことをしてくれたものだ。まずはこちらの詳しい待遇や任務達成時の報酬などを話し合うことが必要だったというのに。いや、今からでも遅くはない。最初が肝心なのだ。

同意を得るべくサガミのほうを窺ったが、奴はため息を吐くと何やら吹っ切れたような顔で国王に向かい綺麗な敬礼をした。違う、そうじゃない。お前まで折れたのではもう完全に断れる雰囲気ではなくなってしまうたではないか。

待遇も報酬も一切不明の上で戦争に参加するのか。一体何の罰ゲームだと心の中で嘆く俺の存在はこの場の人間達から完全に無視され、俺の顔には全てを諦めた、乾いた笑みが浮かんでいた。

第二章 偽りの感情、作られた愛

謁見も終わり、俺達はそれぞれ専属のメイドに案内されて自分の部屋の場所に案内された。部屋は広かったが、元の研究室が懐かしくなるほどに何も無い部屋だった。

部屋を確認した後はアレクの部屋に集まった。現在この部屋にいるのは勇者四人と何故か参加しているソフィア、そしてアレクの専属のメイドの六人である。

初対面の人間と顔を突き合わせるのには慣れていないのだが、この集まりを断る理由が思い浮かばなかったのも、まずは現状把握と友好関係の強化が大事だと自分に言い聞かせ、仕方なく参加している。

「この国の勇者として活動する上で、まずは互いに何ができるのかを確認しよう。まずは私から話をさせてもらうので、その後は順に発言してくれ」

まずはお互いの能力の確認から始めるようだ。自己紹介は先ほど済んだようなものだからな。

「私の武器は魔法剣だ。私は自力で魔法を使うことができるが、この剣に宿る大精霊の加護によって、剣を介してならば魔法を使うことができる。この剣さえあれば魔帝国の兵達が何人来ようとも負けはしないだろう」

アレクは自信ありげな顔で剣を抜いた。確かに普通の魔道具よりは魔力が込められている。どうやら周囲の魔力を少しずつ吸収して溜め込んでいるようだ。これなら魔術行使ができない人間でも

剣に記された術式を発動することができるだろう。

少し気になってどんな術式か使えるのか見せてもらおうと、剣の周りに電光を走らせていた。奴曰く、五つの属性を持たせることができるそうだが、戦争でこんな対人戦用の能力は必要ない。せめて戦術級術式程度は使って欲しいのだが、所詮は中世レベルの魔術といったところか。

アレク本人には残念な話だが、こいつは戦力にはならないな。ともあれ一通り魔法剣を見せ終わると、奴はフェアリスのほうを向いて次を促し、彼女が頷いて立ち上がった。先ほどの発言と服装から推察するに、おそらくフェアリスは回復系の魔術師だ。

「私は攻撃用の魔法が使えませんが、代わりに癒しの魔法が使えます。生きていたのであれば大体の傷を治すことができますと思います。戦場では負傷者の治療をしようと思っております」

「その回復魔法とは、たとえば手足が切断されても後遺症なく治せるのか？」

「はい、息がある間ならば大丈夫です」

「神の恩寵である回復魔法を使うことができるなんて……。フェアリス様は聖女だったのですね」ソフィアがフェアリスの話聞いて感動している。聞いたところによると、この世界でフェアリス程度の回復系術式が使える人間は、聖人と呼ばれる片手ほどの数の人間しかいないそうだ。

再び訪れた衝撃の真実に、もはや言葉も出ない。まさか優先度の高い回復系術式がここまで発達していないとは。

個人の資質に依らない回復系術式は普通に存在するし、俺も何種類か使うことができる。当然信仰心などの無駄な要素はいらない。

ところが二人の話に上がっている信仰心を元にした回復系術式は、個人の魔力資質に依るところが大きい原始的な術式である。これは使える奴は生まれたときから使える、使えない奴はいつまでも使えないという、才能が全ての分かりやすい術式だ。

勇者の召喚なんて術式を完成させる暇があったのなら、一般人にも使える回復系術式の研究をしろと言いたい。

あまりにも偏ったこの世界の魔導技術のレベルに悪い意味で感動を覚えていると、いつの間にかフェアリスの話も終わっていたようで、サガミが立ち上がった。やはり軍人らしく背筋がピシッと伸びていて好印象だ。

「私の工作魔術は、あまり大きな物は作れないが、武器程度の大きさの物ならば作れる。近接戦闘術も一通り修めているので最前線で戦ってもいいが、私としては諜報や偵察といった任務のほうが合っていると思っている。部隊の振り分けの際には一考してくれると助かる」

サガミの言う工作魔術とは、命令入力コマンドと形質変化モーフイングに特化した術式の総称だ。道具や構築物、ゴレムなどの作成が主で、初期文明の発展の際に魔術に頼らない進化を遂げ、後に魔導技術体系を確立した世界でときどき見られる、結構レアな術式と言っている。

少なくともある程度の科学技術と魔導技術の知識があるということ、他の二人よりも使えそう。ちなみに集団戦用に機関銃も作れるそうだ。アレクが何人襲ってきてても倒せるな。

「それじゃあ、次はヤード様の番ですね」

サガミとならば魔術関係の話が通じるかもしれないなどと考えていると、俺の番が回ってきた。

今までの自慢にもならない話を聞いて、ここは自分の魔術の凄さをアピールするしかないという謎の発想に至った俺は、いかにも自信ありげな感じで立ち上がった。

「基本的な魔術は全て使えると思うてくれがいいが、先ほどの名乗りの際に言った通り、第四種戦術式と、後は第七種精神感応系術式を得意としている。戦場に出ることがあるならば、前線で戦うよりも後方支援のほうが向いていると思う」

第四種戦術式とは、魔法陣を用いた超遠距離広範囲を対象とすることのできる術式の総称で、俺が元の世界の研究室で日夜研究を続けていたのもこれだ。

そして第七種精神感応系術式とは、術式発動の際に発音・動作要素を必要としない、主に脳や神経、記憶に作用する魔法の術式体系のことだ。戦略級の術式の中には精神感応系に分類できるものも混じっているが、これはその術式を作ったのが軍の研究室だからで、特に規則性はない。

ちなみに戦術・戦略級の術式は一応軍事機密だ。

「待て、お前が何を言っているのか分からん。戦略級術式とは大規模な範囲魔法のことなのか？ それにもう一つのほうも詳しく説明してくれ。精神感応系と言われてもテレパシーしか思いつかん」俺の話が分からなかったのか、サガミがそんなことを言ってくる。他の奴らも頭に疑問符が浮いているようだ。系統別の分類すら知らない奴らはこれだから困る。仕方がないので実演として念話を発動する。

(つまりはこういう魔法だ)

念話は精神感応系術式の基本であり、必須ともいえる重要な術式だ。これができない奴は精神感

応系を使いこなすことはできないとまで言われている。

口を動かしていないのに声が聞こえることに驚いたのか、四人は俺のほうを見つめてきた。

「あれ？ ヤード様、今お話しになりました？」

「これは……大精霊のお告げと似ているな」

（私も託宣を受けたような感じがします。貴方が話しかけているのですよね？）

（音を媒介としないで会話することができる魔術か。それに詠唱も道具もなしに使えらるとは、素晴らしい魔法の使い手だな）

ソフィアは何をされたか分かってないようだが、勇者達には伝わったのでよしとする。

本当は念話アブストラクト・コミュニケーションじゃなくて洗脳や窃思インフラメンタル・インフィльтраーのほうが得意なのだが、一般的に受けがいい類の術式ではないので言わないほうがいいだろう。それにそういった術式を使えることが知られば、面倒な事態に巻き込まれる可能性が高い。

「この魔術は、たとえばここから前線となっている場所まで飛ばすことができるのだろうか？」

「ああ、人物の特定ができていれば大丈夫だ。何かその人物を特定できるような目印を持っているらえば、この世界のどこにいてもこの術式を飛ばすことができる」

「な、なるほど……。無線が使えないこの世界では、かなり重要な魔術だ」

サガミがいいことを聞いてきたので答えると、奴はこの術式の素晴らしさに気付いて驚いている。だがしかし、俺の話にまともな反応を見せたのは奴だけだった。他の奴らはそれがどうしたのか、と表情で語っている。うん、正直奴らの理解力の低さを舐めていた。

一応無詠唱で炎を出してみせたが、そっちのほうが褒められたのがショックだ。

結局戦略級術式は実演できなかったがまあいい。室内では奴らでも分かるような派手な術式は使えないし、魔法陣を描くのも大変だし、それ以前に使用する魔力量が多すぎて無駄撃ちをしたくない。

俺にとつて何より重要な情報は、ここまで魔導技術の遅れた世界でこれから生きていかななくてはならないということだ。一見絶望しかないように見えるが、考えようによつては最高の舞台だ。

覚悟しておけよ、この世界の人間達。魔導技術の遅れたこの世界は、俺にとつて巨大な玩具箱だ。好きなように遊ばせてもらおう。

「よし、これから四人で力を合わせて魔帝国と戦つていこう。そのためにお互いに信頼し、協力し、助け合つていこうではないか。もちろん毎日の鍛錬を忘れずに行い、この国に早く馴染めるよう努力していくことも大切だ。我々は人々の規範となるべき勇者なのだから、横柄に振る舞うのではなく、そして……」

あまりにも長くなりそうなアレクの話に一瞬で飽きてしまった俺は、真面目に聞いている振りをしてながらこれからのことを考えていた。

正直な話、俺はこいつらと違つて戦争に参加するなんてお断りなんだ。まだ敵の戦力すら分かつていないのに、誰がわざわざ死ぬ可能性のある戦いに参加しようと思うのか。いざとなつたらこの城から逃亡することも視野に入れておこう。

※

あまり発展性のなかった会議の後はソフィア達と一緒に食事を取り、そのまま部屋に帰った。残念ながらこの世界はシャワーも風呂も広まってないらしく、貴族でさえときどき身体をお湯で拭くぐらいしかやっていないようだ。

俺は意外と綺麗好きなので、一日風呂に入らないだけでもかなりの苦痛だ。だが風呂がないなら仕方がない。せめて身体を拭うぐらいはしようと思い、お湯を持ってきてもらおう。

「失礼します、お湯をお持ちしました」

お湯を持ってきたのは専属のメイド、ティアさん。見た目は二十代前半で、烏の濡れ羽のような艶やかな黒髪を肩口までの長さまで伸ばした、非常に可愛らしい顔立ちの女性だ。胸の部分の自己主張が強いのも、俺の好みにはぴったり合っている。

「ヤード様、お身体をお拭きします」

「そうか、済まないな」

構いませんよ、と笑いながら返してくるティアさん。研究室にもこういう娘が欲しかった。服を脱ぎ上半身を晒す。意外と筋肉質だった俺の身体に驚いたのか、彼女は目を大きく開いている。戦略級術式は魔力の他にかなりの体力も持っているので、研究室に籠もっていても毎日の鍛錬は欠かさないのが魔術師のあるべき姿だ。

「よく鍛えられていますね。魔法使いの方々はまだあまり鍛えていない人が多いので驚きました」

「私の世界では魔術師も己の身体を鍛えるのが普通なのだよ」

しげしげと見つめられたのでちよつと力を入れて筋肉を盛り上がらせてみる。俺の身体を拭きな

がら、頬を染めているティアさん。この反応は意外と脈があるのではないかと思われる。

我が人生の春が来るのも速くないな。そう思った瞬間、俺の脳内に警告音が鳴り響いた。

〔第一魔導障壁、貫通されました。第二魔導障壁、防御に成功。攻撃術式の逆探知に成功しました。攻撃術式は至近距離からの第七種物質干涉術式だと想定されます〕

常時展開されている魔導障壁は五層の障壁でできた、対物理・魔術両用の汎用障壁だ。それが俺に対して掛けられた魔術を防ぐと同時に、俺の頭に先ほどの警告文を流した。

物質干涉系ということは肉体情報を探ろうとしたのか、それとも麻痺でもさせようとしたのだろうか。魔導障壁で防げたのならば細かいことは気にしないでいいのだが、この場合問題なのは、至近距離には現在ティアさんしかいないということだ。他に術式の行使ができる存在がない以上、彼女が俺に対して術式を發動したと見るしかない。微かに魔力を放っている指輪が魔道具なのだろう。彼女とはまだ知り合って間もない。いきなり襲われるような関係にはなっていないかつたと信じているので、今の術式は純粹な興味か何かだろうか。俺に興味があると思えばそれも悪くはないな。

とりあえず真実を探るべく、窃思ソートステイルを發動する。

（おかしい、何故肉体情報が見られないのでしょうか？ まさかこちらの意図に気付いて魔法防御用の魔道具を装着しているとか？ でもそれらしい物はありませんし……このままでは公爵様に報告ができない……）

術式が發動して、彼女の真つ黒な心の声が聞こえてきた。

クソ、どうせこんな展開だろうと思ってたよ。術式を發動したのが彼女しかないんだから、ど

う考えても彼女が一番怪しかったのだ。ついでに言えば、俺に内緒で術式を発動している時点で何かやましいことがあると、薄々感じていたのだ。

せめて彼女は誰かに脅されてやっていて欲しかった。それならば脅されている彼女を救い出して好感度アップも狙えたのに。

一通り心の中で嘆いた後、まずは公爵が誰なのかを調べないといけないので記憶閲覧サイコメトリを発動した。彼女の記憶を一通り調べて分かったことは、彼女の思考の中に出てきた公爵はディアン公爵とい、謁見のとき右側のほうにいた男だということだ。まさかそんな国の中枢に近い奴に疑われているとは思わなかった。助けてくれと言っておきながら、こちらのことは信用していなかったということなのか。

勇者と呼ばれたのはいいが、結局は政治の駒として使われるだけなのだ。

せいぜい俺を好きに利用しているがいい。俺も好きにさせてもらう。そうだ、魔導技術の遅れた世界の人間など、弄んでやるくらいでちょうどいい。

「拭き終わりました。また何かありましたら、お気軽に声をお掛け下さい」

「あ、ちょっと待ってくれ」

「はい、何でしょうか？」

俺が色々考えているうちに身体を拭き終わったようで、お湯を持って退出しようとしていた彼女を慌てて呼び止める。俺はこんな扱いをされても黙っているほどお人よしではないので、元凶のディアンという奴にこの仕打ちに対するお礼をしてやる。ティアさんは俺のタイプなので、今回のこ

とは俺の心の内に秘めておくことにしよう。

「この世界でも元の世界と同じ術式が発動するか試したい。協力者が必要なので、済まないが手伝ってもらえないだろうか？」

「あ、はい、大丈夫です。どんな魔法なのですか？」

「特定の人物に遠距離から接触型の術式を飛ばせるようにする術式だ。これが使えるようになれば敵の射程外から前線の兵に回復系術式を飛ばせるようになる」

「っ！ 素晴らしい魔法ですね！ 分かりました、私でよければ協力させて下さい」

俺の術式に興味があるようで、彼女はお湯を床に置いて嬉しそうにこちらにやってくる。先ほどまでの俺ならこの笑顔に癒されていただろうが、彼女の内心を知った今ではこの笑顔が演技だと分かかってしまい、嬉しさよりも虚しさと悲しみが湧いてくる。

だが俺の恨みは彼女ではなく、全て彼女にこんな任務を与えたディアンとかいう公爵に向いていた。その公爵は絶対に許すわけにはいかない。

そんな内心はさておき、近寄ってきた彼女に元の世界の硬貨を渡した。偽造防止のために様々な術式が刻んである硬貨を見て、不思議そうに裏返したり指で弾いてみたりしている。指輪型の魔道具で術式の有無を探っているようだが、渡したのはただの硬貨なので何も起こらない。

今必要なのは彼女が俺に所有権のある物を持っていることだ。精神感應系の術式は使われていないので、こちらの思考を読み取られている恐れもない。今から発動する術式に関して嘘は言っていないので、もし彼女が虚偽を見抜く何らかの手段を持ってもこちらの意図には気付かないだろう

う。

「その硬貨は持っていてくれ。今から使う魔術はその硬貨を持つ者しか対象に取れないし、そちらの同意も必要だ。魔法抵抗の魔道具などを持っているならそれも外してくれ」

「そういった物は持っていないので大丈夫です。いつでも始めて下さい」

彼女は大丈夫だと言っているが、対精神感応系術式の障壁が展開しているのは既に分かっている。不可視状態なので気付かれていないと思っているようだが、彼女の張っている程度の障壁なら貫通して思考を読めるので嘘なのが丸分かりだ。障壁があってもなくても関係ない。

不信感を与えないように注意しながら、第二種精神感応系術式、支配ドミネイトを発動する。この魔術は術者の所有物を受け取った相手しか対象にできず、さらに相手が術式を使われることに同意している場合か、相手が術者との間に交わした契約を破った場合のみ使うことができる術式だ。

対象の記憶や感情を自由に操作できるようになり、さらにその対象が術者から離れていても一部の接触型の術式を飛ばすことができるようになるという便利な術式だ。加えてこの術式は記憶や感情を一時的に操作するだけの洗脳とは違い、操作した後の記憶や感情を普通の状態として固定してしまうので、解呪キャンセレーションなどの対抗魔術でも治すことができない。記憶改ざんするにはうつつけの術式だ。

術式の効果が現れた彼女は記憶を弄られ、精神を変質させる際に術式抵抗の高さから生じる怖気で身体を震わせるが、すぐに落ち着きを取り戻して先ほどとは違った感じの目でこちらを見つめてきた。どうやら問題なく成功のようだ。

「お前の本当のご主人様は誰だ？」

「ヤード様です」

「お前に与えられた任務は？」

「ディアン公爵の部下を装って、奴からできる限りの情報を引き出すことです」

「よし、上出来じゃないか」

これで彼女は俺の忠実な駒となった。先ほどまでの演技とは違い、本当の笑顔でこちらを見つめてくる彼女はとても可愛い。記憶を改ざんするついでに俺に対する好感度も可能な限り上げておいたのだが、この判断は間違っていないかったようだ。

操作された好意を嫌う者もいるかもしれないが、人間の感情自体が所詮は脳内麻薬と電気信号が作り出す錯覚だ。俺としては電子機器のプログラムを弄っているのと大差ないと思っている。

それに何より好みの女性に嫌われているよりは好かれていたほうがいい。

ちなみにこの術式を掛けた人間は彼女が初めてである。元の世界でこの術式に掛かるような術式抵抗の低い奴はいなかったし、俺も失敗する可能性は考えていた。これならこの世界の人間で遊ぶのも簡単そうだな。

「よし、公爵についてお前の知っている情報を教えてくれ」

「公爵は反王家グループのリーダーで、魔帝国とも繋がっています。今回私が命じられたのは、ご主人様を含む勇者達の能力を調査し、できるならば隷属の腕輪を着けることでした」

「早速魔帝国か。この分だと既に勇者達の情報は知られてしまったかもしれないな。それで、その

公爵は魔帝国に協力したら然るべき地位や金がもらえるとも言われていたのか？」

「はい、魔帝国に勇者達を引き渡した暁には魔帝国での侯爵位が与えられるという約定を交わしているそうです。現状この王宮内でこの取引を知っているのは、ディアン公爵とクロイツァ伯爵、グートラン伯爵、ニルド男爵と、私を含む勇者様方の専属の者達の八名です」

なるほど、劣勢の王国を見捨てて魔帝国に亡命しようとしていたのか。確かに勇者という外部の者に頼るしかないこの国は、いつ沈んでもおかしくない泥舟のようなものだ。普通に考えれば勝つのは魔帝国だろうから、公爵の判断は決して間違っているとは言いがたい。

ディアン公爵の犯した唯一の失敗は、俺達というか俺を取引の人質にしようとしたことだ。とてもじゃないが許せるものではない。この恨みはどうやって返してやろうか。

※

そんなことを考えていると、ふと視線を感じた。顔を上げるとティアさん、もうティアでいいか。ティアがもじもじと身体を揺らしながら、何かを欲しそうな目でこちらを見ていた。

「そういえば彼女のことを忘れていた。公爵の情報伝えてくれた褒美を与えてあげなくては。ああ、済まないな。褒美をやろう」

ベッドを叩いて横に座るよう促すと、嬉しそうにそこに座り、こちらに寄りかかってくる。服越しても分かる彼女の柔らかさに、こちらの気分もいい感じに高まってくる。

ベッドに押し倒して唇を奪うと、舌を伸ばし積極的に絡め合おうとしてくる。歯茎を舐め、唾液を送りこみ、彼女の荒い息遣いを聞きながら口の中を存分に堪能する。彼女の口の中は何となく甘

いような気がした。彼女も俺とのキスを楽しんでいるようだった。口を離しても名残惜しそうに舌を伸ばしてくるので、唾液を垂らしてやると美味しそうに飲み込んだ。

「どうだ、満足したか？」

「あ、ご主人様……その……」

俺の問い掛けに、彼女は答え難そうに顔を逸らしている。恥ずかしがりながらも股間を押さえて何かを期待するようにちらちらとこちらを見てくる様子は、俺を挑発しているようにしか見えない。しかし、そこであえて彼女の様子に気付かない振りをして立ち上がり服を整える。主導権握るのはあくまで俺だ。お預けをされた彼女は悲しそうな顔になってこちらを見つめてきた。

「どうした？ 何か言いたいことがあるなら言ってみろ」

「……ご主人様にもっと奉仕させて下さい。私の身体でご主人様を喜ばせて差し上げたいのです」

「いいだろう。服を脱いで待っている」

「っ！ はいっ！」

嬉しそうな声を上げ、彼女ははいそいと服を脱ぎ始める。俺も服を脱いでベッドへと上がる。彼女は着やせするタイプのようで、胸は想像していたよりも大きかった。じっと見つめると、彼女は恥ずかしそうに腕で隠そうとしたが、彼女の胸の大きさを強調しているようにしか見えない。

「まずは私の物を舐めてもらおうか」

彼女の目の前に肉棒を突きつけると、待ちきれなかったように先端に口付けをしてきた。ティアのような女性が舌を伸ばして俺の肉棒を美味しそうに舐め上げているのを見ると、女を支配してい

るといふ優越感が湧き上がってきた。フェラは初めてなのかあまり上手ではないが、根元から先端までを丹念に舐めて、口の中で必死にしゃぶっている。彼女の熱心な奉仕のおかげで、俺の肉棒も硬く勃起した。

「んんっ……ごひゅじんひやま、どうれふか……?」

肉棒に奉仕しながら俺のほうを上目遣いで見てくる彼女を見ると、急に悪戯心が湧いてきた。彼女の頭を掴んで喉の奥にまで叩き込むように腰を動かすと、喉奥に衝撃を受けたせいで彼女がえずいているが、その反応が心地よい刺激となつて俺を感じさせてくれる。彼女が苦しんでいるにもかかわらず何度も腰を叩き込むが、彼女も肉棒を吐き出さず、むしろ必死に舌を動かして俺に快感を与えようとしていた。

「んっ、そろそろ出そうだ、口に出すぞ!」

俺の言葉に頷きながら、彼女はさらに激しく奉仕し始めた。いよいよ出そうになつたので、喉の奥まで届くよう思いつき肉棒を突き入れると、肉棒が勢いよく喉奥に当たつた反射で彼女の喉がきゅつと縮まり、その刺激を感じながら彼女の喉に俺の精液を大量に注ぎ込んだ。

彼女は戻しそうになりながらも必死に精液を飲もうとしているようだが、飲みきれない分の精液が逆流してきて、口から少し零れていた。零れた精液を拭い取り飲み込むと、こちらに向けて蕩けた笑みを浮かべた。

「はああ……お掃除させていただきます……」

中に残つた精液を吸い取り、唾液と精液でベトベトになつた肉棒を卑猥な音を立てて舐めている。



そんな姿を見ていると俺のほうも再び硬くなってきたので、奉仕中の彼女を止めて仰向けに寝かせた。

「そんなに熱心に奉仕されては我慢ができない。今からお前の中に入れるぞ」

「はい！ ご主人様の熱い肉棒で、私の中にご主人様の形を刻みつけて下さい！」

そこまで言われて断れるはずもなく、既に濡れている彼女の膣穴を一気に貫いた。初めてではないのか、膜を破るような抵抗はなかったが、中は処女のようにきつく肉棒に絡みついてくる。彼女のほうも痛みは感じていないようで、積極的に快感を得ようと自ら腰を動かしている。ゆつくりと指が沈みこんでいくような彼女の胸を揉みしだきながら、彼女の言ったように俺の形を覚えさせるべく子宮口にまで届くかのように深く肉棒を叩き込んでいく。

「あああああつ！ ご主人様あ、気持ちいいです！」

「ああ：お前の中も気持ちがいいぞ！ さっき出したばかりだが、またすぐに出てしまえそうだ！」
腕を回し抱きしめてキスをねだってきたので、こちらも強く抱きしめてやる。俺の舌に積極的に絡めてきて、唾液も美味しそうに飲み込んでいく。彼女の膣内は俺の精液を搾り出すようにきゅつときゅつ締めつけてきて、こちらも存分に彼女の中を味わわせてもらった。

彼女の顔は完全に蕩けきっており、まるで恋人を見るように頬を染めて、腕や足を絡めて肌を密着させてくる。その柔らかい感触を楽しみながら、こちらの余裕もそろそろなくなってきた。

「ティア、中に出すぞ！」

「はいっ！ ご主人様の子種を私の中に注いで下さい！」

「ああ、イクぞっ！」

「っはああああん！ ご主人様の子種汁が、私の中に入ってきてますう！」

勢いよく彼女の奥に腰を打ちつけ射精する。彼女も精液が打ちつける快感で絶頂に達したのか、膣内がきつく締まって精液を搾り出そうとしてくる。

あまりの気持ちよさに今まで出したことのないほど大量の精液が出ているのを感じるが、彼女のほうもそれは同じだったのか、あまりの快感で背を反らしながら絶頂し続けていた。

「はあ……はあ……ありがとうございます、ご主人様」

ティアが落ち着くまで待っていると、彼女は恥ずかしそうに顔を俯かせながらも、嬉しそうな声でそう言ってきた。思わず押し倒して第二戦を始めてしまうほどに、ベッドの上での彼女は可愛かった。

※

その後は結局三回もしてしまった。体力的には少し辛いですが、精神的にはこれ以上ないぐらいに絶好調だ。やはり黒髪美人は最高だな。

あの後聞いた話によると、ディアンは魔帝国の軍が攻めてきた際に内側から騒ぎを起こしつつ敵兵を引き入れる任務も受けているそうだ。隷属させた勇者達もそのタイミングで離反させて王国を混乱させようという算段らしい。

まあ勇者達を引き渡す任務は既に達成不可能になっているのだが、そのときまでディアンには知られないようにしておいたほうがいいだろう。ティアは既に俺の味方なのだから、虚偽の報告でも

させておけばいい。

「ティア、今後の予定はどうなっている？」

「まず午前中には第二王女のマルガレーテ様から前線の状況と方針についてお話があります。それが済み次第、午後には早速前線の基地へと出発するそうです」

「第二王女か、この国には王女しかないのか？」

「いえ、第一王子のロベール様と第二王子のランド様がいらっしゃいます。昨日の謁見のときにも国王陛下の隣にいらっしゃったはずですが……」

「そうか、そういえばあるとき誰かいたな」

謁見の最中はそんな人間にまで気を回す余裕などなかったため、覚えていなくても仕方がない。それにしても昨日の今日で早速前線に行くのか。前線は崩壊寸前だと聞いていたが、これはかなり悪い状況だということなのだろう。いきなり劣勢の戦いに加わるのは嫌だが、引き受けた以上仕方がない。

「まずは俺の立場を安定させることから始めるか」

「どういうことでしょうか？」

「そのままの意味だ。俺がこの世界の人間を気遣う必要などないからな。術式を使ってでも味方を増やす」

ティアのように術式を使ってでも手駒を増やし、この世界で自由に動けるだけの立場と味方を得るのが当面の目標だ。まずは地位の高い者が欲しいところだな。

※

朝食のメンバーは昨日とほぼ同じだった。一つだけ違うのは、昨日はいなかった女が増えていることか。多分あれが第二王女なのだろう。

金髪碧眼なのはソフィアと一緒だが、姉と違って凄い髪型だ。縦ロールという奴だろうか、髪型が貴族っぽい。優しい雰囲気、ソフィアとは違い、吊り目気味で気の強そうな印象を受ける。

国王に紹介されたときにはこちらへ軽く頭を下げたが、食事中は一切話さなかった。

食事が終わると第二王女に続いて移動する。移動中に何故かこちらを睨んできたのだが、初めて会った奴に何故睨まなければならないのだろうか。

会議室のような部屋に入り、順に座っていく。今回の参加者は勇者達とこの王女だけだ。

「改めてご挨拶申し上げます、第二王女のマルガレーテ・ル・アンリエントと申します。勇者様達の実力は既に聞き及んでいますわ。我が国に力を貸していただけただけなこと、嬉しく思います」

凜としたよく通る声で自己紹介をするマルガレーテ。ソフィアはお姫様という感じだが、こいつは王女と呼んだほうが似合っているな。高飛車な印象を受ける顔立ちと縦ロールがよく合っている。間違いなく美人ではあるが、純粹に見た目でいえばソフィアのほうが好みだ。

第一印象からいって、こいつを味方につけようとはあまり思えない。指揮官という立場を持っているのはプラスだが、それを帳消しにするほどに性格が悪そうだ。

「さて、早速ですが現在の状況についてお話をさせていただきます。現在我が軍と魔帝国軍は両国の国境地帯にあるグルタ要塞付近で膠着状態となっております。すぐさま要塞が落とされるようなこ

とはありませんが、敵は我が軍よりも遥かに多くの人員を使った物量作戦を展開しておりまして、要塞の人員も物資も足りない状態です。もし仮にこここの要塞が敵の手に落ちるようなことがあれば、我が国の防衛線は大きく後退することになります」

「つまり我々はその要塞の防衛をすればいいのだろうか？」

「ええ、もちろんそれもお願ひしたいのですが、もつと重要なのは要塞に送り届ける物資の護衛です。現在要塞の周辺では魔帝国の軍が物資の運搬を妨害しているのです。このまま箴城させ続け、堪えきれなくなった我が軍が打って出てきたところを叩く算段なのでしょう。逆にここで要塞に冬まで戦えるだけの物資を送り届けることができたならば、冬を越すだけの用意がない魔帝国の軍は撤退せざるを得ないはずですわ」

「なるほど、つまりは持久戦というわけだ」

「箴城というなら、野外で戦うよりも色々とお役に立てると思います」

「はい、勇者様方のお力があれば必ずや我が軍が勝利すると信じておりますわ」

マルガレーテと他の勇者達は和やかな雰囲気でお話をしているが、俺は彼女の言った作戦に疑問を感じていた。要するに物資を補充して相手が撤退するまで箴城する作戦のようだが、相手に規模魔術を行ってできる魔術師がいた場合、逃げ場のない箴城は逆効果だ。

俺がこの世界に召喚された以上、相手にも同じだけの魔術師がいらないとは言いつれない。これが俺とこいつらとの魔術に対する意識の違いか。

そもそも現在要塞には七百人ほどの兵士がいるらしいが、敵はその十倍以上の兵力で要塞を攻撃

しているようだ。あまりにも兵力に差がありすぎる。今まで戦線を維持できていたのも奇跡だとしか言えないレベルだ。今ならディアンが魔帝国に寝返ろうとしていた理由も分かる。

「ヤード様。先ほどから何かお考え中なのですが、私の話は聞いていただけましたか？」

先ほどから何の反応もない俺が会議を聞いていないように見えたのか、マルガレーテがこちらに話を振ってきた。この王女は相変わらずこちらを睨んだままなのだが、よくよく見るとこれは俺のことを嫌っているというより侮っている感じの目だ。

侮られるようなことをした記憶はない。可能性として考えられるのはティアとの情事だが、わざわざこいつが聞き耳を立てていたということもないだろう。単に魔術師だから侮っているのか。

まあ仮にそうだとしても、いきなり喧嘩腰なのはどうかと思う。無駄に強がってみても余裕がないように見えて格好悪い。こちらは友好的な態度で接しておくことにしよう。

「ああ、そちらの話は十分に理解できた。私から聞きたいことは特にない」

「……」

「……どうかしたのか？ 私に構わず、どうか話を続けてくれ」

こちらの返事に応えずに睨みつけてくる視線が不快に感じたので、少し嫌味な声色を込めて返してみる。案の定王女は顔を顰めて、軽蔑するような視線を隠しめせずに送ってきた。

「……そうですね。残念ですが私、貴方にはそれほど期待しておりませんの。昨日のことはお姉様から伺いましたが、他の勇者様方は素晴らしい魔法を披露して下さったのに、貴方の魔法は正直期待外れだったと言わざるを得ません。私の話が退屈でしたのなら、退出なさって結構ですわ」

何というか、実に脳筋な考えをしている女だ。確かに昨日実演した念話テレバシーは見た目こそ地味かもしれないが、鮮度の高い情報という、戦争においては何よりも重要なものを伝令などよりも遙かに早く伝えることができる便利な術式だというのに。

あまりの残念さにむしろ憐憫の情が湧いてくるが、周りの奴らの中で王女の言葉に否定的な態度を見せているのはサガミだけだ。アレクはこの王女の言葉に頷いており、フェアリスも否定はしないのを見ると王女の言葉に同意のようだ。情報戦の大切さも理解してないとは、これだから無教養な人間は嫌いだ。

いくら無知だからといって、こちらの実力も知らないうちから人を侮っているこの王女には苛立ちを覚える。売られた喧嘩は買う主義なので、少し痛い目を見させてやる。

「どうやら私はこの会議に不要のようだ。悪いがここで抜けさせてもらおう」

そう言って部屋を後にする。部屋を出ていく俺を見て、王女は勝ち誇った表情を浮かべている。その余裕の表情が崩れるときを楽しみにしてやる。

※

会議室を出て部屋に戻り、ティアに第二王女についての情報を聞く。王妃が産んだ二番目の子で王位継承権的には四番目、つまり一番低い。

継承権争いに参加していないおかげでかなり自由に振る舞っているらしく、騎士団を率いて前線に行き、指揮を執っているようだ。今はグルタ要塞の指揮官として防衛を一任されているらしい。

指揮官としての腕はあるようで、城の兵士達からの評判も高く、今では王子達よりも兵士達から

信頼を寄せられているようだ。しかしながら、今はそんなことはどうでもいい。必要なのは弱点となるような何かだ。

「マルガレーテ様ですか。まず失態や醜聞などは聞いたことがありません。王位継承に関しては元々望みがほとんどないので争いもなく、親子の仲も兄弟姉妹の仲もいと聞いております。それに文武に優れ、決断力もありますので、男性だけでなく女性の方からも好かれていらつしやいますね」

「この国ではなかなか有能な人物というわけだ……実は同性愛の気があるとか、何かそういった噂はないのか？」

「そうといった話も聞いたことがあります。確かに王妃様やソフィア様には男性の家族よりも親しげに接していらつしやるようですが、少々潔癖な方なので、同性愛に限らず夫婦以外の男女の色事に関してもあまり好ましく思われていないとのことです」

「ならば弱みを握るよりも、周りから追いつめるほうがいいか。ティア、お前は何かいい案があるか？」

「そうですね、マルガレーテ様は幼い頃から恵まれた環境で育ってきたので、味方と思われている人間に裏切られた経験はないはず。多数の人間に醜聞を広めて人々からの信頼をなくしていくのもいいですが、それよりも家族や部下に裏切らせるような策がいいかと思えます。ここは彼女が特に信頼しているという第一王女のソフィア様を利用すべきかと」

可愛い顔をして真つ黒な発言をしているティア。彼女はあまり怒らせないようにしよう。

それにしてもなかなか残酷な提案だな。俺としては軽い脅し程度の仕返しでいいんだが。彼女は

俺が侮られたのがそれほどまでに悔しいのだろう、マルガレーテの話をしているときの声にも王女への怒りが滲んでいる。

抱き寄せて頭を撫でてやると安心したのか、こちらの胸に顔をすり寄せてくる。よしよし、可愛いメイドのためにも頑張つてやってやるか。

※

ティアの案に乗ることにした俺は、まず一番仲がいいというソフィアを当たつてみた。おそらく昨日の話をマルガレーテに伝えたのは彼女だろうから、ついでにそのときの様子も聞いておこう。

内密な話があると先ほど念話で伝えておいたので、部屋に着くと既にソフィアが待っていた。

「済まないな、話があるなどと急に言い出して」

「いえいえ、勇者様の頼みならお話の時間を割く程度は簡単なことですから」

メイドが入ってきて、紅茶を二人分用意して出ていく。一応探知を試みるが、部屋の周辺に逃げな人物はいないようだ。念のために遮音結界サウンドバリアを張つておき、盗み聞きされる可能性もなくなしておく。

「昨日のことは既に第二王女様にも伝えたようだな」

「ええ、勇者様達の魔法のことはちゃんと伝えておきましたよ。マリィは特にサガミ様の魔法が気になったようです。でも、ヤード様の魔法は私が上手く説明できなくて、ちゃんと伝えられたかどうか分かりませんでした。私の知識不足のせいで、済みません」

マリィとはマルガレーテの愛称らしい、だとしたらソフィアはソフィとか呼ばれていそうだ。

上機嫌に話し続ける彼女に気付かれないように窃思ソフトステイルを使うと、確かに昨日のことを伝えていたのは分かった。しかしながら、俺の情報はやはり正確に伝わってはいなかったようだ。ソフィアの説明では口を動かさずに会話ができるくらいしか伝わっていないだろう。

俺の次に術式について詳しいだろうサガミですら完璧に理解していないと思うので、ある意味では仕方がないかもしれないが、全員俺の戦略級術式というのを勘違いしている。

戦略級とは攻撃用の術式だけではなく、超遠距離転移や集団意識誘導なども含めての術式なのだ。そもそも攻撃用の戦略級術式は星間戦争の際にも使われるほど大規模なものだ。大体が敵味方の区別なく、下手をすると国の一つや二つは殲滅してしまうぐらいに大雑把なものしかないから、既に戦端が開かれている場所や自国内での使用は不可能と言っている。

しかし彼女らの想像の威力は大幅に間違っており、十数名を吹き飛ばせる程度の威力だと思っ
ているらしい。そんなものは戦略級ではなくただの範囲術式程度で、戦術級ですらない。

範囲術式など使える魔術師はそれなりにいるだろうから、俺の頼りない情報を聞いたマルガレーテが俺を侮りたい気持ちは分からなくもない。まあだからといって実際に侮辱された以上、仕返しを止めるつもりはないのだが。

「話の腰を折って済まないが、聞いていたきたいことがある」

「そういえば何かお話があるとのことでしたね。私でいいのですしたら、何でもお話し下さい」

ここで第七種精神感應系術式、思考誘導ガイドポストを使う。これは相手の理性を鈍らせ、こちらの言葉に疑問を持たせなくする術式だ。別に相手の思考を操作できるといった術式ではないが、これも洗脳ブレインウォッシュと

違つて對抗術式で解呪されない上に、支配ドミネイトと違つて条件がないので使い方によつてはかなり便利な魔法である。

「実は先ほどの会議でマルガレーテ様と言ひ争ひをしましてしまったのだが、どうやら私は足手まといだと思われているらしい」

「それは……大変失礼致しました、妹に代わつて謝罪させていただきます。お氣分を害されたでしょうが、きつと妹も勘違いをしているだけだと思ふのです。悪いのはヤード様の魔法の説明をした私ですから、マリーはどうか寛大な心で許してあげてください」

「ああ、大丈夫だ。こちらの態度にも非があつたのだから、彼女が悪いと言つてゐるわけではない。恥ずかしながら会議室を飛び出してきてしまったのでな、ただ彼女と和解できるように協力して欲しいのだ」

「そうですか。それならば是非とも私に協力させて下さい」

ニコリと笑つてゐる彼女を見てみると、本当に妹との仲がよさそうなのが分かる。これなら予定通りにいけそうだな。

「ありがたい。貴女と彼女はとても姉妹仲がいいと聞いているので、貴女と私が仲睦まじくしているところを見せたなら、彼女も私と友好的な関係になつてくれると思ふのだが、どうだろうか？」

「素晴らしい考えですね。私もそれがいいと思います」

既に話がおかしくなつてゐるのだが、彼女は氣付いた様子もなく俺の意見に賛同している。マルガレーテの性格を聞いた限りでは、俺とソフィアが仲睦まじくしている姿を見たら発狂しそうだ

思うのが普通だと思ふが、俺の使つた術式のせいでもそんな疑問も湧いてこないのだろう。

さて、まだまだ作戦の準備が始まったばかりだ。席を立つと彼女の近くへと行き、きよとんとしている彼女の手を握る。

「実は今までの話、貴方に伝える言葉を言いたいがためでもあつたのだ」

彼女の目をしっかりと見つめながら、一呼吸おいてその言葉を告げる。

「ソフィア様、一人の男として貴女を愛している」

言葉と共に無詠唱で術式を発動。第七種精神感応系術式、楽園^{ひんてん}。効果は脳内麻薬を分泌させ、対象を幸せな気持ちにするだけ。精神感応系術式の中でも最も簡単な部類の術式だ。

ついでに狂化^{マッドブレイク}も使つておく。こっちは本来の効果で使えば相手の理性を剥ぎ取り興奮状態にさせるものだが、あえて効果を落として少し興奮する程度にしてある。

先ほど使つた思考誘導^{ガイドポスト}の効果に乗せてこの二つの術式を受けた彼女は、どう考えても唐突で怪しい俺の告白を素直に信じてしまう。一瞬驚きで固まつていたのだが、はつと意識を取り戻すと頬を赤らめて顔を逸らした。

「ご、ご冗談はお止め下さい。私達はまだ出会つたばかりではありませんか……」

「一目惚れという言葉もある通り、愛に時間に関係ない。それとも私のことが嫌いなのだろうか？」
「決して嫌いなどはありません！ あつ、その、いえ……」

恥ずかしがりながらもちらちらとこちらを見ているのは、俺の言葉を嬉しがっていると考えていいのだろう。今彼女は俺の告白と同時に感じた多幸福感と興奮で、まるで恋をしたような錯覚に囚わ

れているはずだ。

理性が抑制され上手く働かないので、王族である彼女と俺のような突然呼ばれた得体の知れない人間とはそもそも付き合えないということは思いつきもしないようだ。

俺に对しどう反応していいか迷っている彼女を軽く引き寄せ、鼻が触れそうな位置まで顔を近づけさせる。瞳を潤ませて真っ赤になつてゐる表情はティアほどではないが可愛いと思う。

「ソフィア様、私の愛を受け取ってもらえないだろうか？」

自分で言うのもなんだが、今の自分の姿はかなり気持ち悪いな。ともあれここでダメ押しにもう一発の樂園を發動。再び訪れた多幸福感に彼女の身体の緊張が解け、とろんとした表情になる。これはもう大丈夫だな。

「ヤード様。私も貴方のことを愛しております」

とても綺麗な笑顔で返事をしてくるソフィア。お互いに見つめ合い、自然と唇が触れ合う。初めてなので軽くに留めておいて、唇を離す。

「ソフィア……」

「ソフィと呼んで下さい……」

「ソフィ、愛している」

「私も愛しております、ヤード様」

腰を抱いてぎゅっと引き寄せると、彼女もこちらの頬に手を添えてきた。

そのまま二度目の口付けをする。こちらから舌を伸ばし、彼女の可愛らしい唇を押しつけて口の

中へと入る。彼女のほうもおずおずと舌を伸ばしてきたので、優しく舐め上げてみる。何度か試すうちに舌を絡めようとしてきたので、お互いの熱さを感じながら舌を絡ませる。

初めてのキスで上手く呼吸ができなかったのだろう、口を離すと下を向き胸に手を当て、少し息を弾ませている彼女。

そんな様子を見てるとまたキスしたくなってしまうので、彼女の頬に手を当ててこちらを振り向かせて口を付ける。まだ息が整っていなかったので、荒い吐息が当たるのを感じながら彼女の口の中を思う存分堪能する。

彼女のほうも俺の口の中まで舌を伸ばしてきた。口の中で舌が触れた場所が何となく気持ちよく感じる。

俺達はお互いの唾液を混ぜ合い、舌の感覚がなくなるかと思うほどに濃厚な口付けを、城の者が昼食の時間を告げるために扉をノックするまで交わし続けた。

よし、これでマルガレーテに仕返しをする準備は整った。

※

昼食の後、兵達が出発の準備で慌しく動き回っている中、ソフィの協力でマルガレーテを呼び出すことにした。ソフィの部屋で二人が来るのを一人待っていると、二人分の足音が聞こえたので、こちらも身なりを整えておく。

「お待たせしましたヤード様。お願いされた通り、マリーを呼んで参りました」

「済まないな。この忙しい中で時間を割いていただいて」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>